

広報 [災害統計]

車両系建設機械及び高所作業車の労働災害による死亡者数の推移と令和2年における発生状況

建設荷役車両安全技術協会 本部

平成18年からの車両系建設機械及び高所作業車（以下車両系建設機械等）の労働災害による死亡者数の推移がグラフ1の折れ線グラフ、また機械の種類別の内訳が棒グラフである。

令和2年の死亡者数は52名であり、平成18年の92名と比べ、40名の減（43%減）であった。

機械の種類別にみると、多くの機種で減少しているが、解体用機械は増加した。また、その他の機械では、コンクリート打設機械で1件発生した。

令和2年に発生した車両系建設機械等の労働災害による死亡者数は、前年の37名より15名増（41%増）となった。

機械の種類別・業種別の死亡者数は表1・グラフ2のとおりである。

機械の種類別では、「掘削用機械」に起因するものが19名、「整地・運搬・積み込み用機械」が13名と圧倒的に多く、次いで「解体用機械」6名となり、これはここ数年の傾向である。

「高所作業車」も6件発生し、前年の2件

より急増した。

業種別にみると、建設業の35名が全体の約67%を占めており、例年同様であったが、土木工事業では前年より急増し、建築工事業では急減した。

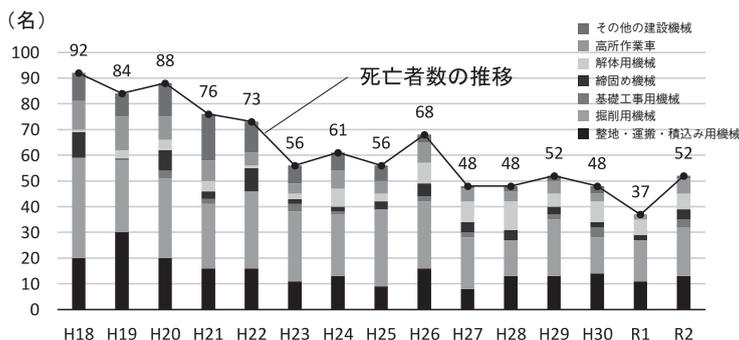
次に、車両系建設機械等の種類別・事故の型別に分類したものが表2・グラフ3である。

事故の型では、「はさまれ・巻き込まれ」が20名、「墜落・転落」が13名と多く、この上位2項目で全体の約63%を占めている。また「墜落・転落」は、前年より大幅に増加した（前年比8名増）。毎年上位を占める「激突され」は8名で前年より減少した。

災害事例をみると、ドラグ・ショベルでの揚重作業（準備作業含む）中によるものが、クレーン仕様であるか否かに関わらず多く発生している。

また、件数が増加した高所作業車は6件のうち、誤操作によるものと思われる「はさまれ・巻き込まれ」が散見された。

[資料提供：厚生労働省]



グラフ1

車両系建設機械・高所作業車の労働災害による死亡者数の推移

表1 車両系建設機械及び高所作業車の種類別・業種別死亡災害発生状況（令和2年）

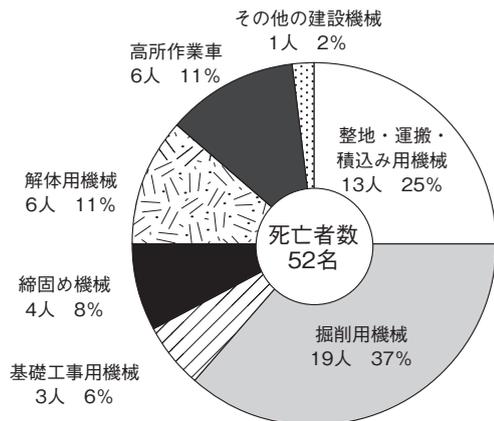
（単位：名）

業種 機械の種類	製造業	鉱業	建設業			運輸 交通業/ 貨物 取扱業	農林業/ 畜産業・ 水産業	商業	その他	計
			土木事業	建築工事業	その他の 建設業					
整地・運搬・ 積み込み用機械	2	2	5	0	0	0	1	1	2	13
掘削用機械	0	0	13	1	2	0	1	0	2	19
基礎工事用機械	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3
締固め機械	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
解体用機械	0	0	0	1	0	0	0	2	3	6
高所作業車	0	0	2	2	1	1	0	0	0	6
その他の建設用機械	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
計	2	2	26	5	4	1	2	3	7	52

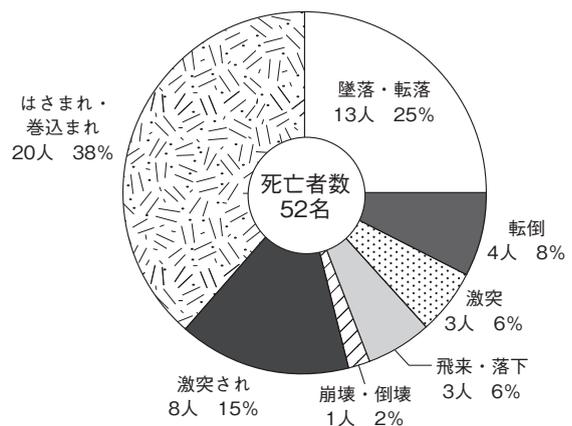
表2 車両系建設機械及び高所作業車の種類別・事故の型別死亡災害発生状況（令和2年）

（単位：名）

事故の型 機械の種類	墜落・転落	転倒	激突	飛来・落下	崩壊・倒壊	激突され	はさまれ・ 巻込まれ	その他	計
掘削用機械	7	2	0	3	1	3	3	0	19
基礎工事用機械	0	0	1	0	0	1	1	0	3
締固め機械	2	0	0	0	0	0	2	0	4
解体用機械	0	1	1	0	0	1	3	0	6
高所作業車	1	0	1	0	0	0	4	0	6
その他の建設機械	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	13	4	3	3	1	8	20	0	52



グラフ2 機械の種類別



グラフ3 事故の型別